

Math Math 算数

Math Math 数学

算数・数学だより
福島県教育庁義務教育課
令和7年8月27日発行
第9号

全国学力・学習状況調査の結果を徹底活用！（その2）

○ 福島県としての結果分析と学力向上の方略について



義務教育課が作成した「令和7年度授業改善グランドデザイン」を読み、福島県全体で取り組みたい課題、学習指導に当たって大切なことを確認しましょう。

令和7年度
授業改善グランドデザイン
「学びの促進推進プラン」
施策1の推進に向けて
全国学力・学習状況調査の結果分析と学力向上の方略

1	全国学力・学習状況調査の結果概要	P1～2
2	授業改善3つのポイント・チェックリスト	P3～4
3	各教科の結果概要	P5～10
4	学力調査と民間調査の分析	P11～12
5	授業改善のための情報リンク	P13

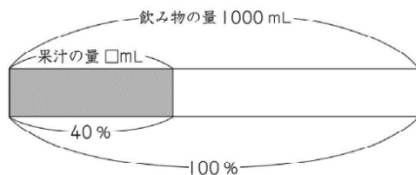
令和7年8月
福島県教育庁義務教育課

QRコード
https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/702877.pdf

令和7年度授業改善グランドデザインには、教科ごとに、福島県の子どものための強みと課題について端的に分かりやすくまとめられています。「福島県全体で取り組みたい課題と指導の重点」では、算数・数学どちらについても、授業の中で表現活動を取り入れ、前号でも紹介した3種類の説明の仕方を確認しながら、数学的に説明できるように指導することの重要性について示しています。そして、「質問調査項目で見られる福島県の特徴」には児童生徒質問と学校質問の分析が示されており、学校全体の教育活動や授業の方向性を共有したり、課題を多角的に捉えたりするための視点や手がかりとすることができます。詳細につきましては義務教育課のHP（下記のリンク）で御確認ください。

また、「Math Math 算数・数学 第6号」でもお伝えしたように、小学校と中学校のそれぞれの学びを知ることが重要です。例えば、今回の中学校数学の大問2では、オレンジの果汁が40%含まれている飲み物について文字と割合を用いて解決する問題が出題されました。この問題は、3年前（令和4年度）の算数の調査でも出題されており、同一学年に対する追跡調査と言えます。全国も福島県も、3年前の正答率に対して、今年は10%以上低下しました。ここで、中学校の教員は、「割合について、子どもたちは小学校の算数で『何を学んできたのか』『どのように学んできたのか』」を知ることで、算数の学びの上に立って数学の授業をすることができますし、小学校の教員は、「割合について、中学校の数学では『何を学ぶようになるのか』『小学校のうちに身に付けさせる力は何なのか』」を意識した算数の授業をすることができます。小学校と中学校のそれぞれの課題について知っておくことで、授業づくりの視点のヒントが見つかりますね。

(2) オレンジの果汁が40%ふくまれている飲み物があります。この飲み物 1000 mL には、果汁が何 mL 入っていますか。答えを書きましょう。



2 オレンジの果汁が40%含まれている飲み物があります。この飲み物 a mL にオレンジの果汁は何 mL 入っていますか。 a を用いた式で表しなさい。

↑ 令和7年度調査問題（数学）
全国正答率51.9%、福島県正答率47.3%

← 令和4年度調査問題（算数）
全国正答率64.6%、福島県正答率61.4%



令和7年度授業改善グランドデザイン（福島県教育庁義務教育課）

<https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/702877.pdf>

○ 学級・児童生徒が抱える課題を把握するために



各学校に送られてきている「S-P表」を活用して、子どもたち一人一人の
つまづきの実態を分析し、指導の個別化を図りましょう。

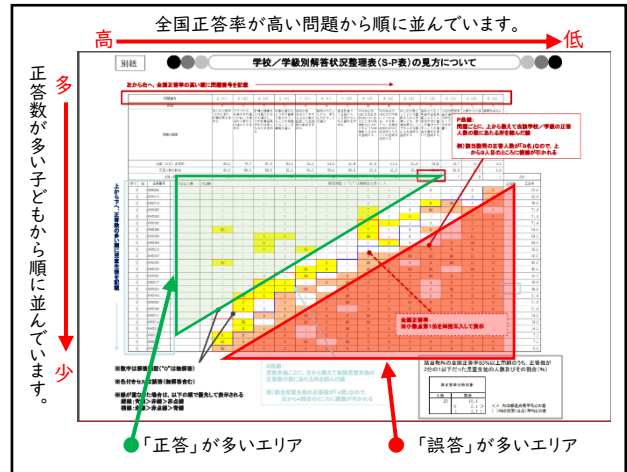
学校/学級別解答状況整理表 (S-P表) の活用方法について

活用方法

- ①全国的な傾向との比較
- ②学校・学級ごと、児童生徒ごとの「重点的に指導すべきと考えられる設問」の把握等により、学習上の課題を明らかにし、教育指導の改善・充実に活用
- ③「重点的に指導すべきと考えられる設問」の把握例：
 ・設問（内容）より特定の設問（黄色セル）に着目
 ・当該児童生徒にとって難解だったと考えられる設問であり、
 ・一人一人の児童生徒に対し、個に応じた指導を行う
 ことが有効と考えられる設問
- ④「重点的に指導すべきと考えられる設問」の把握例：
 ・設問（内容）より特定の設問（黄色セル）に着目
 ・当該児童生徒にとって難解だったと考えられる設問であり、
 ・一人一人の児童生徒に対し、個に応じた指導を行う
 ことが有効と考えられる設問
- ⑤全国的な傾向との比較例：
 ・内閣府（内閣府）が全国調査（調査結果）より上位と並びに編成
 ・当該学校・学級の正答率の取付が、全国正答率より低かった設問
 （詳細内容からどこでつまづいているかに注目し、分析することが重要）

S-P(エス・ピー)表は、全国学力・学習状況調査の結果を、
学校や学級単位で、縦と横がそれぞれ児童生徒(S:Student)
と設問(P:Problem)の正答数の多い順に並べ替えた表の中
に、S曲線(青)とP曲線(赤)を書き入れたものです。これを活
用することにより、平均正答率などの数値だけでは把握できな
い、学校や学級全体の課題の傾向や、個々の児童生徒が理解
していない可能性が高い設問を見付け出すことができます。

S-P表のつくりとして、右の図のように、調査問題が
全国平均正答率の高い問題から順に並べ替えられて
おり、児童生徒が正答数の多い方から順に並べ替えら
れています。この並べ替えによって、表の左上のエリア
は「正答」が多く出現し、表の右下は「誤答」が多く出
現する傾向が現れます。この表に、実際の子どもの名前
を入力して、よく観察してみてください。「上位生徒の○
○さん、全国平均正答率が高い問題なのに、間違えて
いる。どうしたのかな?」、「大問6(3)の回答類型99
が多くなっているな。解答用紙のコピーを見返して
みて、どんな解答をしているのか確認してみよう。」など、
学校や学級の平均正答率や個人の正答数だけでは見えてい
なかった課題が見えてくるはずです。



○ 「チーム学校」として、教師集団の目線合わせ



全国学調の結果をもとにして、「学校として、子どもたちにどのような力を身に
付けさせていくか」という振り返りを行うことは大切です。担当の先生だけで分析
するのではなく、他学年・他教科の先生方や養護教諭等にも入ってもらい、チーム
学校として、多角的に分析する場を設定することをおすすめします。それによって、
教師集団の目線合わせをしていくことが大切です。

今回は全国学調の結果を活用するというテーマでしたが、全国学調という目の前の問題を解決できるように
指導するのではなく、将来、子どもたちが直面する複雑化・困難化する問題を解決できるように、子どもたちの資
質・能力をどのように育成していくべきかを考えていかなければなりません。これからも、子どもたちと先生方の
Well-being を実現するために、「オール福島」「チーム学校」で共通実践を積み重ねていきましょう。



学校/学級別解答状況整理表 (S-P表) の活用方法について (文部科学省)

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku-chousa/1409618.htm